

学科長　　平田由紀江

日本女子大学人間社会学部現代社会学科は、1990 年 4 月に創設されました。女子大学においても社会科学を専門に勉強することができるようにとの意図から、学部の新設とともに、あらたに設けられた学科です。社会学を中心に、経済学、グローバル論、文化人類学、あるいは環境学、スポーツ学、社会史や歴史学を専門とする教員が互いに協力して、複雑な現代社会を解明しようとしています。

たくさんの社会問題が、現在の世界や日本に山積みとなっていますが、現代社会学科では、教員と学生がともに学びあいながら、それらに、専門の知恵を結集して立ち向かい、未来を切り開いていく勇気と力を得ていきたいと願っています。

みなさんとお会いできるのを楽しみにしています。

学科については、日本女子大学 HP の現代社会学科のページもご覧ください。
閲覧方法：下記 URL をクリックしてください。
https://www.jwu.ac.jp/unv/academics/integrated_arts_and_social_sciences/studies_on_contemporary_society/index.html

スタッフからのメッセージ

現代社会学科のスタッフから皆さんへの自己紹介です。「現社」（げんしゃ；学科の愛称）では
どのようなことが学べるのか、各教員の研究の内容や講義の内容について説明します。

池田　和弘　IKEDA, Kazuhiro
環境の社会学、社会データ分析

皆さんとこのキャンパスでお会いできるのを、楽しみにしております。

大学に入ってから学ぶことは、高校までの勉強と少し違っています。何か気になることがあるけれども、うまく言葉にならない。どういう方向からどう考えれば、うまく言葉にできるのか。一言で言うと、その方法を学ぶところが大学です。

そうなると、勉強するというよりも、日常生活の中でさらっと流していたことにゆっくりと目を向け直すような作業が必要になってきます。その意味でも、大学に入る前に一度気持ちをリラックスさせた方がよいですね。考えるということにもある種の勘どころというか、コツのようなものがあります。私が担当している環境や統計についての授業では、そのコツをうまく伝えられればいいなと思っています。

大沼　義彦　ONUMA, Yoshihiko
スポーツ社会学

スポーツやレジャーという回路を経ることで見えてくる現代社会を考えたいと思います。別言すると、非労働時間に行われている人間の活動から、社会や生活のあり様を考えてみる、ということになります。人間は、四六時中働いている訳ではありません。身体を休めたり、息抜きにいろんな活動を行います。行楽に出かけたり、スポーツや学習・社会活動なども行っています。

こうした場から社会を覗き込んでみると、普段は素通りしてしまうものごとが見えることがあります。（極端な例ですが）オリンピックやパラリンピックでは、自国を熱狂的に応援する人びとの姿、出場選手の国籍、性別、障害の有無や文化を目にします。それはまた時代を経るごとに変化しています。オリンピックは、時々の社会のショー・ケースに見えます。

授業では、スポーツに限らず、余暇の楽しみごとを事例に、その文化的社会的変遷、そしてその〈いま〉を探りたいと考えています。そこから見えにくくなった社会の輪郭に迫りたいと思います。

遠藤　知巳　ENDO, Tomomi
社会学（近代社会論、言説分析、メディア論、社会理論）

現代社会論Ⅰ（マス・メディア論）：大勢のお客さんを相手にしたメディアの浅さや鈍さははじめから分かっていること。しかし同時に、メディア批判やメディア叩きに精を出しても仕方ありません。そのどうしようもなく浅くて鈍いメディアが、どうしようもなく現代社会に組み込まれてあることの意味を、社会学的に考察します。

比較社会論Ⅲ（ヨーロッパ）は、近代＝現代といういしくみを作り出したヨーロッパという文明圏のダイナミックな特質を、日本・中国その他と比較しながら考察していきます。

現代社会論Ⅱ（近現代文化論）：この講義は、現代社会を含んだ近代の地平を、具体的な形象を手がかりに考察します。取り上げる主題は毎年変わり、現代のみを扱うこともありますが、少し歴史的な視角を入れた議論になることが多いです。



尾中　文哉　ONAKA, Fumiya
比較社会学、タイ研究

皆さんは、これから大学という未知の世界に入ってこられるわけですが、まずおすすめしたいのは、自分にとってかけがえのないテーマ（たとえば、装うこと、奏でること、香り、食べもの、踊ること、育てること、住まい、など）はなにか、考えてみてはどうか、ということです。それはすぐには思いあたらないだろうと思いますが、さがしゆく中で、迷う中で、どのように学んだらよいか、どのように暮らしたらよいか、おぼろげながらみえてくるのではないかと思います。

また、それとともに、日本国内か外国かをとわず、さまざまな場所に旅をされることをおすすめします。これは僕が特に「比較社会学」という方法をとっているからでもありますが、それを別にしても、旅は、皆さんに元気の源を与えてくれるであろうと思うからです。「かけがえのないテーマ」が、そのなかで初めて見つかる場合もあるように思います。

授業としては、比較社会論、地域社会論、基礎演習、社会調査基礎演習、社会学史などを担当しています。それは、いまいった二つのすすめを実行していくときのガイドブックのような役割をすればいいなとおもってやっています。皆さんが参加してきてくれる日を、心まちにしています。

上田　誠二　KAMITA, Seiji
歴史学、日本近現代史

高校までの日本史について、みなさんのなかには、今の自分の現実生活とは切れている何か別世界のような印象をもっている人も多いかと思います。これに対して、現代社会学科で学ぶ日本史はまったく異なります。みなさんの感性とくに音感覚や、みなさんが現代社会に感じる生きづらさのルーツを探ります。

私が担当する「日本史学論」では、たとえば、一定のリズムに合わせ行進できる身体がつくられ、五線譜に落とせない音に違和感を覚えるような感性が明治の政治と教育によって生み出され定着していく過程を跡づけます。それを受けて「日本史学方法論」では、そうした感性が、アジア・太平洋戦争でまさに「軍需品」となり、にもかかわらず、それが戦後に至れば民主主義を支え、ひいては高度成長を牽引していく動態を描きます。

また「日本社会論Ⅲ」では、現在「ハーフ」と名指される子どもたちや在日コリアンと呼ばれる人びとが抱え込んだ「生きづらさ」の歴史を跡づけ、それを受けて「日本社会論Ⅳ」では、そうした「生きづらさ」の点在する戦後日本社会を、合唱や歌謡曲、ジャズや映画音楽、ロックやアイドル、カラオケや交響楽から照射し、音楽に彩られた「戦後史」を描きます。

なんか難しそうに思われるかもしれませんが決してそんなことはありません。日本史とくに近現代史とは、みなさんの身体や感性に埋め込まれているもっとも身近な学問なのです！



渋谷　望　SHIBUYA, Nozomu
社会学(地域社会論、現代生活論、文化社会学)

現代は「豊かな社会」といわれていますが本当でしょうか。たしかに消費社会はわたしたちに「より多くの消費を」と呼びかけてます。しかしこの 10 数年のあいだに貧困は顕在化し格差が広がっています。2011 年 3 月の災害の傷は癒えず、原発事故は収束していません。こうしたなかでわたしたちが考えるべきことはたくさんあります。この状況をどう生きればいいのか、オルタナティブな社会はありえないのか、そして何よりも真の豊かさとは何かという問い。もちろん簡単に答えは出ませんが、大切なのは問題を見つけることだと思います。皆さんと一緒にこうした難問に取り組みたいと思っています。



西村　一之　NISHIMURA, Kazuyuki
文化人類学、東アジア地域研究

今、文化という言葉によって様々なことが説明されています。向き合って暮らす者同士の仲が良かったり悪かったりするとき、文化が同じあるいは異なることが理由に挙げられます。また、原発事故原因の一つとして日本の文化が調査委員会の英文報告書で取り上げられもしました。そして、人・物・情報が急速にそして大量に世界を駆け巡る現在、人びとの生活は次第に画一されているといわれ、固有の「文化」が失われていると指摘されます。ところで、その「文化」とはどんなものなのでしょうか。どんな時に私たちは「文化」を気にし、目を向けているのでしょうか。文化人類学は、この文化という言葉を入り口に、人とは何なのかを考える学問です。

私たちが持つ文化は、いろいろな姿をして目の前に現れます。それは衣、食、住、宗教、労働、家族のあり方など広範にわたります。多様な文化の姿を知ることは、あたり前に思っていたことがひっくり返る衝撃的な経験です。そして、また改めて自分のことを考える機会でもあります。文化人類学を「する」ということは、そんな刺激にあふれたことです。

皆さんには、是非、現代社会の様々な現象に対して、文化というキーワードをもって臨み考えてほしいと思います。

野辺　陽子　NOBE, Yoko
社会学、文化研究

私は、日韓の家族、特に「多様な家族」といわれるカテゴリーに入るような、様々な家族を研究対象にしています。その中では親子関係、特に血縁によらない親子関係に関心を持っています。今まで、様々な家族の当事者などにインタビュー調査を行い、当事者のリアリティを明らかにするだけではなく、そのリアリティに影響を与える制度やサポートなどについても分析を行ってきました。

社会の変化と同様、家族も常に変化しています。「多様な家族」「家族の多様化」というと、個人の自由な選択にもとづく明るい家族像を思い浮かべるかもしれません。しかし、実際には様々な家族メンバーの権利と権利が対立したり、新たな倫理的問題が発生したりと、必ずしも良いことばかりではありません。授業では、このような家族の変化を家族社会学やジェンダー論の理論と方法を使って考

えていきます。

担当している科目は現代家族論Ⅰ、現代家族論Ⅱ、ジェンダーと社会です。現代家族論Ⅰとジェンダーと社会では、基礎的な内容を、現代家族論Ⅱでは応用的な内容を扱います。「当たり前」のものとして考えることのない家族を社会学的に分析する面白さを味わってみませんか。

平田　由紀江 HIRATA, Yukie
社会学、文化研究

私の主な担当科目は「グローバリズムの社会学」です。みなさんは、「グローバリゼーション」という言葉を一度くらい耳にしたことがあるでしょう。この言葉を聞いて、どのようなことが思い浮かびますか？日本に来る外国人観光客のこと？英語教育のこと？インターネット？それとも‥‥。すでに世界のありとあらゆるものが、もちろんこれを読んでいるあなた自身を含めて、「グローバリゼーション」と無関係ではいられなくなっているのですが、だからこそ、この現象をきちんと理解するためには、学際的な知識と経験が必要です。そしてその理解は、意外に思われるかもしれませんが、私たちの「日常」について知ることへとつながります。さらにそこから、講義のタイトルでもある「グローバリズム」という言葉に注目してみると･･･。この続きは、講義の時にお話ししましょう。みなさんとお会いするのを楽しみにしています！

マニュエル･ヤン　YANG, Manuel
歴史社会学

「専門は何ですか？」と聞かれるたびに言葉に窮する。師匠の専門は 17～19 世紀イギリス／大西洋の民衆史だが、わたしの修士･博士論文のテーマは日本の思想家吉本隆明だった。最近はなぜか現代アメリカ社会についてもっぱらしゃべったり書いたりしている。例えば、ボブ･ディラン、ヒップホップ、大統領選挙、ブラック･ライヴズ･マターなどについて。だが、専門分野を変えた、あるいはそれが明確になったという意識はない。雑多にみえる対象の関係性をあえて説明しろというなら、1960 年代の運動が生み出した民衆史の観点を貫き発展する師匠の研究も、同時代の学生運動に影響を与えた吉本の思想も、ディランの音楽やその後登場するヒップホップも、現代アメリカの社会･政治･文化･運動の変容も、すべて「後期資本主義」の権力構造とその階級的葛藤と深く関わる。つまり「現在」が何であり、それがどうやって成り立ち、どこに向かっていて、そのなかでわたしは何をすべきかを自問自答している。一見無関係にみえる異なった事象や人物や出来事を接続し、時代を逆なでする歴史的想像力をいっしょに培いましょう。

周　燕飛 ZHOU, Yanfei
労働経済学

時代が大きく変わっています。とくに女性の生き方や家族のあり方が大きく変化しています。大学の授業では、なぜ女性の生き方や家族のあり方が変化するのか、それには経済水準の似ている国で共通性がみられるのか、日本独自の特徴は何か。

とくに注目すべき社会変化は情報技術の進歩と経済のグローバル化だと考えています。情報化社会に取り残されないために、主体的かつ継続的に学習できるよう、「独学力」を磨くことが大切です。また、国際的な視野をもって物事を見たり多様な価値観を受け入れ、積極的に行動するひとが求められています。

4年間の大学生活をつうじて、「広い視野」と「独学力」を身につけてほしいと思っています。



社会を知るには――

社会を知るには、本や新聞を読むことも重要ですが、教室の「ソト」にでて学ぶ必要があります。友だちとの会話、バイトでの経験、親子関係など、すべてみなさんが学校の「ソト」で身をもって経験したことなので、社会を知るための生きた素材となります。

しかしそれだけでなく、インタビューやアンケートなどの「調査(フィールドワーク)」によって体系的に「ソト」を知る必要もあります。現代社会学科では、「社会調査基礎演習」をはじめ、調査の方法を学ぶ授業も提供しているので、ぜひ受講してください。